

質的研究への取り組み

— Grounded Theory Approach による研究のプロセス —

藤 澤 洋 子・小 松 良 子*・片 桐 千 鶴*
三 澤 寿 美・町 浦 美智子**

Conducting a Qualitative Study

— A Research Process of Grounded Theory Approach —

Yohko FUJISAWA, Ryoko KOMATSU, Chizu KATAGIRI

Sumi MISAWA, Michiko MACHIURA

Abstract : The authors conducted a qualitative study for the first time. The purpose of this paper is to describe our experiences of learning activities and the actual research process using grounded theory approach in order to contribute to qualitative nursing research.

This paper includes an overview of qualitative research, reasons for selecting grounded theory approach, learning activities, and supervisory activities.

The reasons for conducting the qualitative study were twofold : 1) Nursing is a professional discipline to care for human beings from a holistic view, and there is a limitation to understand nursing phenomena in quantitative research. 2) Our research purpose is to understand a process of changing feelings and behaviors during pregnancy and categorize them. Especially, grounded theory approach is an appropriate research method because its purpose is to develop concepts or a theory about a special phenomenon. Regarding the supervisory activities, three direct meetings and more than 40 e-mail exchanges were held, however, the results of analyzing the data were insufficient. From our experiences, it is clear that improving our ability to collect and analyze the data and having constant supervision for analyzing the data are important and crucial.

Key words : Qualitative research, Grounded theory approach, Nursing

はじめに

わが国の看護研究の動向¹⁾をみると、1960年代後半の日本看護学会の創立や、雑誌「看護研究」

の創刊の頃が創始期と考えられている。以後1970年代の前半までの看護研究の方法は、日本看護学会の演題から見て事例研究が最も多く、次いで調査研究であった。1977年から1979年の間にこれが逆転し、調査研究が1位である。また1990年代²⁾でも、この傾向は続いている。一方、最近の母性看護学の研究方法の推移³⁾をみると、調査研究を主とした量的研究が約76.0%を占めており、事例研究・内容分析を主とした質的研究が約8.6%、質的+量的研究が15.0%で、その他が0.3%であり、年次推移では質的研究を含めたものがやや増加傾向

* 山形県立保健医療大学看護学科
山形県立保健医療短期大学
〒990-2212 山形市上柳 260 番地
Yamagata Prefectural University of Health Science
Department of Nurse Science
260 Kamiyanagi Yamagata City 990-2212 Japan

** 大阪府立看護大学
Osaka Prefectural College of Nursing Habikino 3-7-30,
Habikino-shi, Osaka, 583-8555 Japan

にある。

看護は、単に生理学的な問題だけでなく心理社会的あるいは文化的な問題を持つ生きた人間が対象であり、その対象に関連する種々の現象に関わる職業である。しかし、これらの問題や現象の解明はまだ発展途上であるといっても過言ではない。いわば先行研究や既存知識の少ない学問領域であり、従来の自然科学的量的演繹的研究の手法は馴染みにくいし限界があると考ええる。現象の一つ一つの意味するところを地道に発見し看護独自の理論を構築することが急務である。前述の看護研究における質的研究の増加も看護の研究者達がその必要性に目覚めつつあることを示唆していると考えられる。

そこで私たちは、母性看護の対象である一人の女性が母親になる過程でどのような体験をしているかを正しく捉え概念化し、母性発達課題の理論構築のための一助とする目的で帰納的質的研究に着手することにした。ここでは質的研究に取り組んだプロセスを中心に報告する。

質的研究の概略

看護における質的研究は、米国では1970年代後半から1980年代になって台頭し始め、1990年代に入ると学術的な研究として認められるようになり、研究助成金を獲得できるようになった⁴⁾。今日わが国でも質的研究は注目をあびており、前述したように母性看護学の研究ではその1割を占めるようになってきている。ここでは、質的研究の概略として、質的研究の前提、目的、質的研究方法の特徴、評価について述べていく。

1. 質的研究の前提

看護は Art and Science であると言われているが、これまでの量的研究が追究してきたのは科学としての看護の側面であった。その量的研究の前提となるものは次のとおりである⁵⁾。

- ① 研究対象は必ず存在し、その事象は観察し得る絶対的・客観的な存在である。
- ② 事象には秩序・規則性・一貫性があるので、研究することで法則や一貫性を見出せる。
- ③ 事象は因果関係から成り立つ。

これらは科学に対する見方として真実はひとつで、誰が研究しようとも得られる答えはただひとつであるという実証的・分析的立場をとり、客観

性を重視している。しかし、看護が対象とするのは生きた人間であり、人間のありようをすべて客観的にとらえることは難しい。

客観性を重視した量的研究に対して、質的研究は人間社会のありようをそのままとらえようとするアプローチである。その前提となる科学に対する見方は、人間のとる行動、認識、感情の意味を把握し、解釈するという解釈学的な立場をとり、ここでは主観性を重視する。つまり、経験をもつ対象者がエキスパートであり、ある現象を理解するためには対象者から学ぶ、教えてもらうことが重要である。これは Munhall⁶⁾ の「看護では、主観的な体験を分かち合い、言葉を共有し、相互関係や人間的な意味づけを重視し、考案されるものより体験される現実を大切にする」という言葉にも反映されている。

2. 質的研究の目的

量的研究では、既存の知識に基づき演繹的な方法で因果関係を検証していくが、質的研究では帰納的な方法を用いて既存の知識では説明できない人間現象の新しい現実を発見していくことを目的としている。つまり、生きている人間を対象とし、人間の認識、行動、感情、信念などを明らかにし、人間の生活・パターンを理解するという現象の記述・説明に焦点をあてている⁵⁾。

看護は人間現象を全体論的にとらえようとする専門分野であるために、量的研究では探ることのできない事象の探求を目指している。さらに、看護では看護実践という専門職的な介入が必要であり、そこでは人間一人ひとりの個性性をとらえた看護実践が求められる。このように考えると、今後看護学がさらに発展していくためには質的な研究をしていくことが重要であると考ええる。

3. 質的研究方法の特徴

1) 主な質的研究方法の比較

現在、看護学で用いられている質的な研究方法を理解するためにはオリジナルとなる学問領域、哲学的な立場、研究への問い、データ収集方法などを十分に理解する必要がある。何故なら研究への問いによって研究方法が異なってくるからである。ここでは Morse⁷⁾ が取り上げている①現象学、②エスノグラフィー、③グラウンデッド・セオリー、④エスノメソドロジーおよび談話分析の4つの質的研究について、Table1 にまとめた。その他の質

的研究方法として事例研究，歴史的研究，内容分析（Content Analysis），KJ法，アクション研究などがあるが，いずれも社会科学分野から派生した研究方法である。

Table1 に示したように質的研究の学問領域は哲学，人類学，社会学であり，哲学的な立場は現象学，象徴的相互作用理論，記号論にわたっている。研究への問い，つまり研究の目的とするところは，現象学では体験の意味，エスノグラフィーでは状況の克明な記述，グラウンデッド・セオリーでは現象のプロセス，エスノメソドロジーでは談話の分析である。

Parse⁸⁾によれば，看護独自の質的研究方法といわれるものはLeiningerのエスノナースィング，Newmanの研究手法，そしてParseの研究手法であると言われているが，わが国にはあまり浸透していないのが現状である。

2) 量的研究プロセスとの相違

量的研究と質的研究の研究目的の相違はこれまでに述べたことから明らかなように，量的研究では概念枠組みを使用し，仮説を検証することが多い。量的な研究方法は直線的にすすみ，サンプル数は多数であり，データ収集，分析，結果は順番にすすみ，結果と考察はデータに基づいて忠実に記述する。一方，質的研究は概念枠組みを常に必要とするのではなく，仮説もない場合が多い。研究方法は多角的で，サンプル数は比較的少数である。データ収集と分析は同時進行であり，らせん型にすすみ，結果と考察は具象と抽象を繰り返

しながらすすむので，区別が明白でない場合が多い。

質的研究のデータ収集にはTable1のように様々な方法を用いるが，量的研究と最も異なる点は，面接や観察などは研究者自身がデータ収集の手段，用具となることである。そこで，研究者は現象に忠実に事実を抽出するために，インタビュー技術や観察力，洞察力を高める努力をする必要がある。また，データ収集中には対象者と研究者との間に何らかの相互作用が生じるが，そのこのの意味を充分考慮しながらデータ収集を行う。そのために研究者はその時の状況や研究者自身の考え，感情を詳細に記録するためにフィールドノートを使用する。これはどのようなデータをどのように収集したかというデータの信頼性とも関連してくる。

4. 質的研究の評価

質的研究を評価する場合，研究自体の信頼性と妥当性を問う問題がある。しかし，この信頼性と妥当性という考え方はもともと量的な研究の評価に適用されている概念である。つまり，信頼性は同じような研究を時間と研究者が異なって繰り返したとしても，同様の結果が得られるというのが量的研究である。しかし，質的研究では研究過程は多角的で，データ収集の手段としての研究者が違えば，当然異なるデータが収集され，結果も異なってくることがおこり得る。つまり，量的研究のようにまったく同じ結果が得られるという意味の結果の反復性は質的研究には適用しにくいと言える。これは対象が人間であり，研究者も人間で

Table 1 主な質的研究方法の比較

学問領域	研究 方 法	研究 へ の 問 い	データ 収 集 方 法
哲 学 (現象学)	現象学	意味への疑問： 体験の本質を明らかにする	会話のビデオ 個人体験が書かれた逸話 現象学的な文献 哲学的な反省 詩 芸術
人 類 学 (文 化)	エスノグラフィー	記述的な疑問： 文化的な集団の価値，信念， 実践	半構成的面接 参加観察 フィールドノート ドキュメント 記録 写真 地図 家系図など
社 会 学 (象徴的相互 作用理論)	グラウンデッド・セオ リー	プロセスへの疑問： おそらく段階や局面をもっ ているような，経時的な体験も しくは変化	面接（録音する） 参加観察 メモ，日記
記 号 論	エスノメソドロジー 談話分析	言語的なやりとりや談話に関 する疑問	談話（録画する） 観察 フィールドノート

文献⁹⁾より改変

あるため、そこには相互作用がおこり、研究者自身の人生経験、キャリア、価値観などがデータ収集や分析に影響を及ぼすことが考えられるからである。そこで研究者はそれらのことを認識した上で研究をすすめていくという姿勢を持つ必要がある。ただし、データそのものの信頼性は研究者が観察したり解釈した内容を対象者に再確認するという方法で高めることは可能である。

次に、質的研究の妥当性であるが、導きだされた研究結果が人間現象の事実を記述・説明しているかどうかはその研究を読む人によって判断されると言える⁹⁾。これは研究対象となる現象への関わり方、研究の目的、データの収集・分析過程の内容、結果などがどのように記述されているかによって左右される。アメリカでは種々の質的研究の評価基準が発表されている⁹⁾が、これらは個々の研究者によって評価基準に違いがみられ、量的研究のように明確な評価基準が確立されているとは言えない。このように、質的研究の評価は量的研究と異なり、まだまだ発展途上の段階にある。

Grounded Theory Approach を選んだ理由

Grounded Theory Approach は、Glaser と Strauss¹⁰⁾ によって開発された研究方法であり、実証的、帰納的分析から理論を生成する方法である。彼らがカリフォルニア大学サンフランシスコ校看護学部医療社会学科に勤務していたこともあり、健康問題や生活問題を抱えた人々に専門的援助を提供するヒューマンサービス領域の研究が多いことから、それらの領域に適した研究方法であると言われている。

木下¹¹⁾ は、「Grounded Theory Approach に適した現象の特性は、第一に実践的領域であり、もう一つは、取り上げようとする現象がプロセス的性格を持っていることである」と述べている。看護のように援助的サービスという実践的領域では、援助的相互作用としてのサービスそのものに内在するプロセス的性格と、サービスの利用者自身の側にも生活上の事情による心身の変化というプロセス的性格がある。

したがって、本研究は妊婦である看護サービスの利用者が、妊娠という生活上の事情によって気持ちと行動がどのように変化していくのか、そのプロセスをデータに根ざして帰納的に概念生成し

ようとするために、この研究方法が最も適していると考えた。

今回の研究への取り組みのプロセス

1. 学習活動

平成12年5月研究メンバーで話し合い「日本の社会・文化的背景に根ざした母性発達課題の概念・理論の構築」をテーマとした質的研究に取り組むことを合意した。メンバー全員質的研究の実践ははじめてであり、学習活動が必要であった。

1) 文献学習

平成12年5月から月2回のテンポで抄読会をはじめた。文献は、質的研究方法に関するものとして Grounded Theory Approach¹⁰⁾、現象学的方法¹²⁾、内容分析¹³⁾、エスノグラフィー¹⁴⁾を中心に、又母性発達課題に関するものとして Reva Rubin の研究とそれに関連したわが国の研究論文¹⁵⁾ 及びその他の母性に関する文献¹⁶⁾ を中心に検討した。

文献検討の結果、本研究の研究方法としては、妊婦に起こっている変化のプロセスを見ることが、そこから概念を導き出すのが研究の狙いであるため、Grounded Theory Approach が最も適していると判断した。また、母性発達課題については、Rubin の理論について妊婦が自らに課す4つの母性課題と、それを達成するための5つの操作について理解を深めた。そして、わが国には日本人の母性発達課題を問い直す研究が見あたらないことも確認できた。

2) Grounded Theory Approach と Rubin の母性発達課題について講義受講

平成12年10月7日、8日に前述したような質的研究の概略と Grounded Theory Approach, Rubin の母性に関する理論とそれに基づいた研究についての講義を受講した。

これらの講義は、文献学習の結果を更に裏づけるものであった。また講師を交えての懇談は、具体的で本研究への多くの示唆が得られた。

3) パイロットスタディ (インタビューと分析のトレーニング)

妊婦3例に本研究と同じインタビュー・内容に基づいてインタビューを行い、その逐語録を作成し、研究メンバー全員で分析を試みた。その結果をもとにスーパービジョンをうけ本研究のデータ収集と分析のために備えた。

研究参加への依頼文書作成に当たっては、一般の妊婦さんに親しみを感じてもらえるように絵を入れたり、専門用語をなるべく使わないよう配慮した（資料1）。

半構成的なインタビューでは、できるだけ誘導質問をしないように心がけたが、途中会話がとぎれて気まずい雰囲気になることもあった。また助産婦という職業柄、すぐ看護介入しそうになることも気になった。事実に密着した良質のデータを得るためにはかなりの訓練が必要であることに気づいた。

分析については、逐語録の一語一語を口に出して読むことによって、インタビューの場面を思い浮かべ、何でつまったのかなどが反省できた。またメンバーからの色々なコメントも非常に参考になった。何よりも難しいと感じたのは、先入観にとらわれず人の言葉をそのまま受け入れることであった。

4) Grounded Theory 研究会

この研究会は、最初は日本看護科学学会の交流集会として発足し、この研究方法に見識の深い4人の看護大学の教員が中心になり始まったものである。現在は研究に取り組んでいる研究者や大学院生で構成している私設の研究会として継続している。研究会は、2カ月に一度のペースで開催され、会員による Grounded Theory に関する原書文献の抄読、領域の著名講師による講演、会員による研究発表が行われた。本研究メンバーの1人がこの研究会の会員となり、情報を持ち帰り全メンバーに提供し、それをもとに討論し本研究の糧とした。この研究期間中に参加できたのは、講演会2回、抄読会1回、研究発表会2回であった。

講演会は、木下氏¹¹⁾の「グラウンデッドセオリー・アプローチによる分析技法」と、水野氏¹⁷⁾による「GTゲームにおけるオープンコード化の作業について」であった。木下氏は非常にオーソドックスな感じのグラウンデッドセオリー法について話され、水野氏は独自にみだしたグラウンデッドセオリーの技法について講演された。両氏の講演を聞いて、この技法の幅を感じあまり硬苦しく考えず、気負わず取り組もうと思った。

抄読会は「Grounded theory in practice」¹⁸⁾の第5章「ヘッドハンティング会社による人材調査過程におけるタイミング」という社会学の内容であっ

た。看護から離れて考えることによって考え方の視野が広がった。

研究発表は、プレゼンター（東京大学博士課程の院生）による発表で、分析のプロセスやまとめ方の具体例を示され、生きた教材として非常に参考になった。

2. スーパーバイザーとの関わり

スーパーバイザーにはカリフォルニア大学サンフランシスコ校博士課程で Grounded Theory Approach による研究方法を学び、帰国後もこの研究を継続している質的研究者をお願いした。スーパーバイザーは遠距離であるため、直接メンバー全員と面談できたのは合計3回であった。

実際の分析過程にはいると、頻回にスーパーバイズの必要性があったためE-mailの交換になった。E-mailによるスーパーバイズが40回を越えた。しかしE-mailでは意思の疎通に限界があり、十分に分析能力を身につけたとは言い難いが、特に最初概念とカテゴリー生成にはスーパーバイズが有効であった。

データ収集や分析のための基礎的能力についても少しずつ学びとれたし、この方法のおもしろさも感じられるようになった。私達の主体性を重んじた指導方法であったことと、今後は徐々に自分たちの力で発展させることができるころまで学習できたことに感謝したい。

3. 研究のプロセス

研究そのもののプロセスは、本紀要の77ページから86ページに発表しているが、ここでは論文の形態から漏れる詳細について報告する。

1) 準備段階

① 研究方法決定の検討

方法を決めるに当たって私達の Research Question は何かをまず話し合った。臨床で妊婦に保健指導する際、学校で学生に妊婦が母親になる過程を講義する際の理論的裏付けの貧弱さを解消したい。そのために実際に妊婦はその生活の中でどのようなことを経験しているのか、そしてそれをどのように意味づけしているのかを知り、そのプロセスを見ることと、それを一人の体験として記述するだけにとどめずに概念化するために、自分たちが実行可能な方法は何かという観点から検討した。

② 倫理的配慮

倫理的配慮としては、依頼文書を作成し、同意してもいつでも研究への参加を中止できること、診療に不利益の無いこと、データは研究以外に使用しないことを明記した。同時に同意書を作成し、研究についての丁寧な説明の後、同意書にサインをもらうことにした。総合病院の病院長にも依頼文書を提出し了解を得た。本学の倫理委員会では、質的研究の取り扱いが未検討のため、とりあえず倫理委員長に研究計画書を提出し了解を得た。

2) データ収集

データの収集は半構成的インタビューで行った。インタビューは準備の段階で訓練したが、やはり最初は苦労があった。またインタビューは外来の診察後に実施したので、帰りを急ぐことも考え、20分間のインタビューは短すぎたのではないかと反省している。話しの内容が導入部から盛り上がり部、終了するまでには1時間位が必要だと思われる。

3) データの分析

グラウンデッドセオリー・アプローチの目的は概念や理論を構築することであるが、分析の第一歩はコーディングから始まる。コーディングにはオープン、軸足、選択の3種類がある。まずはオープンコーディングから始まり、次に軸足と選択コーディングは行き来しながら、分析をすすめて行く場合が多い。私達が行ったコーディングのプロセスは本論文の研究方法及び考察で述べているが、ここではその試行錯誤の経過を述べる。

(1) オープンコーディング

オープンコーディングは、インタビューデータをコード化していく過程で、話されている言葉一つ一つにラベルをつける作業である。私達は今回の研究過程で、この部分が最も困難が多かった部分であった。それは、従来の量的研究が抽象から具象化するのに対し、質的研究では具象から抽象化していくために、抽象化に不慣れで想像以上に難しかった。一つ一つの言葉にラベルをつける作業で先ず行き詰まってしまった。ここでスーパーバイザーの例示が非常に効果的であった。回を重ねるに従って要領を得てコード化できるようになったが、一人でなくグループで分析をすすめていったことも有利であった。一人の場合は前述の水野の講演によると、メモを克明にとってメモと

話すと言われたことが理解できた。Theoreticalnote, Diagram (Figure1) もそれぞれ書けるようになった。

(2) オープンコーディングと軸足コーディングの繰り返し

コード、セオリティカルノートから概念(in-vivo 概念も含めて)が出てくる。これがいくつか集まると大きな概念が見えてくる。そこでその概念の属性になる部分とその属性の次元はどこにあるかをデータに戻りながら分析し、一つの大きな概念を導き出す。この辺で少し理解が深まり分析の楽しさを感じるようになったが、1週に1度位の研究会では、前回の分析過程の微妙な部分を忘れて盛り上がってくるまでに時間を要した。テープにとればよかったと反省しながら、テープにとっても聞き返す時間がとれなかったりで、結局メモ、メモと言いながら分析に直接関係ないと思われることでもメモに残した。

次に、複数の概念間の関係を検討しながら軸になりそうなものを出してくる過程で、文脈をたどる必要が出てくる。その時にはインタビューアがフィールドノートを見ながらその場面を思いだし

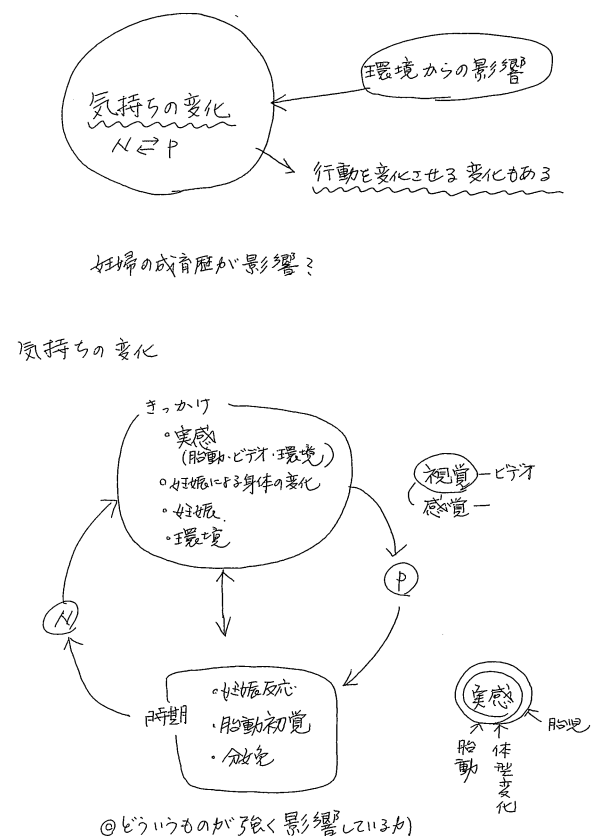


Figure 1 Diagram

(対象者の表情や様子), 逐語録の行間にあるものを説明することもあった。

(3) コアカテゴリーとストーリーライン

オープンコーディングと軸足コーディングの繰り返しで出てきた複数の概念間の関係をもとにコアカテゴリーの説明をする。研究テーマにもどり, 全体像を図に書いてみると, 達成感が得られた。関連図とストーリーラインの記述は first author に任せて研究会は一応休止した。

論文にまとめるに当たっては, 自然科学系の論文とは異なり, はっきり形式が定まっているわけではない。質的研究の概略で述べたように記述方法も, 評価基準も発展途上の段階である。とにかく「自分たちが何を目的にどのような分析のプロセスで結果を導き出したかをわかりやすく説明する」ことを心がけた。論文にまとめる段階では, E-mail の交換によるスーパーバイズは有効であった。

今後の課題

初めての質的研究への取り組みということで, Grounded Theory Approach の手順に沿ってデータを収集・分析し, 概念の構造化を経験できた。しかし, 質的研究は研究者の分析能力がそのまま結果に影響するため, 今後は分析能力のトレーニングを重ねることが何より大きな課題である。インタビューの方法についても, 十分なデータを得るための適切な時間, 技術を身につける必要がある。

参考文献

- 1) 樋口康子: 看護 MOOK — 看護実践と研究 —, 金原出版株式会社, 東京, 1992.
- 2) 飯田晴美, 梅崎敦子, 小野雄一, 黒川みどり, 佐藤亜衣, 小林万里子, 廣瀬規代美, 林陸郎: 看護における研究の変遷と現状 — 看護系雑誌 4 誌における研究の傾向 —, 看護研究, 32(1), 85-89, 1999.
- 3) 石村利子, 三枝清美, 村本淳子, 永見桂子, 澤井早苗, 今田葉子, 前原澄子: 母性看護の研究の動向と今後の課題, 看護研究, 34(3), 185-199, 2001.
- 4) 黒田裕子, 川島みどり: 看護のエビデンスをつくる質的研究, EB Nursing, 1(2), 76-84, 2001.
- 5) 井上幸子, 平山朝子, 金子美智子編集: 看護学体系 10 看護における研究 (第 2 版), 日本看護協会出版会, 東京, 1999.
- 6) Munhall, P. L. : Nursing philosophy and nursing research : In apposition or opposition ? Nursing Research, 31(3), 176-177, 1982.
- 7) Morse, J. M. : Designing funded qualitative research, In N. K. Denzin. & Y. S. Lincoln. (Eds.) Handbook of qualitative research, p.220-235, Lippincott, Philadelphia, 1994.
- 8) Parse, R. R. : Building knowledge through qualitative research : The road less traveled. Nursing Science Quarterly, 9(1), 10-15, 1996.
- 9) Denzin, N. K. & Lincoln, Y. S. : Introduction ; Entering the field of qualitative research. In N. K. Denzin. & Y. S. Lincoln. (Eds.) Handbook of qualitative research, p.1-17, Lippincott, Philadelphia, 1994.
- 10) Strauss, A. & Corbin, J. : Basics of qualitative research — Grounded theory procedures and techniques, 1990. 南祐子, 操華子, 森岡崇, 志自岐康子, 竹崎久美子 (訳): 質的研究の基礎 — グラウンデッド・セオリーの技法と手順 —, 医学書院, 東京, 1999.
- 11) 木下康仁: グラウンデッド・セオリー・アプローチ — 質的実証研究の再生 —, 弘文堂, 東京, 1999.
- 12) 早坂泰次郎: 現象学をまなぶ — 患者の世界とナース —, 川島書店, 東京, 1987.
- 13) Krippendorff, K : Content analysis : An Introduction to its methodology. Sage Publication, Beverly Hills, Colifornia, 1980. 三上俊治, 椎野信雄, 橋元良明 (訳): メッセージ分析の技法「内容分析」への招待, 勁草書房, 東京, 1999.
- 14) Leininger M. : Qualitative research methods in nursing. Grune & Stratton, 1985. 近藤潤子, 伊藤和弘, 太田喜久子, 岡谷恵子, 岸田佐智, 黒田祐子, 小松浩子, 鈴木敦子 (訳): 看護における質的研究, 医学書院, 東京, 1997.
- 15) 大平光子, 前原澄子, 森恵美: 妊娠期の母親役割獲得過程を促進する看護の検討 (第 1 報) — 模倣及びロールプレイに対する看護介入 —, 母性衛生, 40(1), 152-159, 1999.
- 16) 大日向雅美: 母性の研究 — その形成と変容の過程: 伝統的母性観への反証 —, 川島書店,

東京, 1998.

17) 水野節夫: GT ゲームにおけるオープン・コード化の作業について, Quality Nursing, 7(11), 67-89, 2001.

18) Strauss. A, Corbin. J: Grounded theory in practice, SAGE, London, 1997.

— 2001. 11. 15. 受稿, 2002. 1. 17. 受理 —

資料1 依頼文書

インタビューへのご協力をお願い

ご妊娠おめでとうございます。妊娠中の生活はいかがでしょう。私達は、山形県立保健医療短期大学で看護・助産婦教育に携わっている教員であり、経験年数約10年の助産婦です。その仕事の中で、妊娠中の女性が母親になることについて、どのように考え、行動しておられるのか、いつも関心を持っております。この研究は、みなさま方の妊娠中の気持ちの変化や赤ちゃんに対する気持ち、将来の育児についてのイメージなどをお聞かせ頂き、妊娠中の女性がどのような母性発達課題を達成しようとしているのかを把握し、日本の文化的背景に根ざした母親役割取得過程に関する理論を構築する事を目的としています。そして、その結果を今後の教育や看護に生かしたいと考えています。

このたび、みなさま方にご協力をいただき、調査を行う計画をいたしました。つきましては、ご多忙のところ誠に恐縮でございますが、研究の趣旨をご理解いただき、インタビューにご協力くださいますようお願い申し上げます。

インタビューに要する時間は約20分です。インタビューは外來の静かな場所かあなたの指定する場所で行います。お話いただいた貴重な内容を十分に正確に受け止める事ができるようにするために録音させていただきますが、すべての秘密を厳守いたします。みなさまがお受けになる診療や看護にはご迷惑をおかけしないように十分に配慮させていただきます。また、診療や看護の内容に影響することも決してございません。

お話いただいた内容は、文章化した後分析し論文としてまとめ発表する考えであります。

なお、インタビューを終了させていただいた後においても、協力を取り消すことも可能です。ご協力の取り消しを希望される場合はこの用紙に記載してある番号を下記連絡先までご連絡ください。また、ご質問やご意見がございます場合も連絡先までご連絡ください。

なにとぞインタビューにご協力くださいますようお願いいたします。

山形県立保健医療短期大学
母性発達課題研究グループ



藤澤 洋子
片桐 千鶴
小松 良子
三澤 寿美

要 約

筆者らは今回初めて質的研究に挑戦した。本論文では初学者であるが故に経験した研究に向けての学習のプロセスを披露し、今後の看護分野での質的研究の発展に資することを目的とし、質的研究の概略, Grounded Theory Approach を選んだ理由, 具体的な学習活動の内容, スーパーバイザーとの関わりなどをまとめた。

看護は人間現象を全体論的に捉えようとする専門分野であり、量的な研究では限界があること、妊婦の気持ちや行動の変化のプロセスを帰納的に研究したいことから、質的研究に取り組もうと考えた。特に Grounded Theory Approach は概念生成や理論の構築を目指しているので、今回の研究に適切であると判断した。スーパーバイザーとの関わりは、3回の直接面談と40回以上のE-mail交換という形式を取らざるを得なかったために、データ分析が充分であるとは言い難い。今後の課題としては、データ収集の手段である研究者の能力を高めること、データ分析では継続的に具体的な指導を受けることが示唆された。

キーワード: 質的研究, グラウンデッド・セオリー・アプローチ, 看護